

書評

家でのこと

訪問看護で出会う13の珠玉の物語



- 著 高橋恵子
- 定価 1540 円 (本体 1400 円 + 税)
- 判型 A5 判
- 頁数 128
- 発行 医学書院

評者

聖路加国際大学大学院看護学研究科 教授
山田雅子

何も変わらないけど、
訪問看護なんです

計画書には書かれないケア

まだ歩き始めない子どもと暮らしている母親、ごみと暮らしている老婦人、老親のベッドの脇で眠る娘、引きこもり、介護を放棄しているかのような息子、痛い注射を嫌がる女の子……。みんな違う物語の中で主人公として登場する人々です。でもそれは、読者である私が第三者の立場で見た世界で、その世界を主人公の視点から捉えれば、歩き始めてはいないが愛に包まれた親子であるし、ごみではなく大切な品であるし、介護負担ではなく温かい母とのかけがえのない時間であるし、インスタントの味噌汁をうまいと言う父がいます。

そうした物語に第三者としての訪問看護師が登場します。彼らはこうした生活者を前に、何をしているのでしょうか。『家でのこと』に描かれている看護師の行いは、生活者に静かに語りかけ、伸びきった爪を切ることから始まり、特別なことはしなくてもその人を認め、独居高齢者の隣人に見守りを頼み、あるときは黙って待ち、連れ合いを亡くした老人をしばらく気にかけてみるといったことです。看護師が計画書に書く内容はほとんどクローズアップされないのです。それがむしろ面白く、そこに訪問看護の本当の価値があると感ずることが出来ます。

訪問看護の真の価値と成果

『家でのこと』に登場する訪問看護師は、主人公に怒られたり拒否されたり、応援されたり、頼られたり、託されたりします。大事なことはその人をまずは受け入れること、興味を持って知ろうとすること、関わり続けることといった行いであって、こうした行いを学ぶことで自分自身が成長していくのです。では、訪問

看護師が学びを深めることでの成果は何かでしょうか――。

この本を読むと、結局は何かを変えることではないけれど、お互いの心が豊かになることが成果として見えたりもして、そこもまた面白く納得することができました。訪問看護サービスを導入し、それをきっかけにデイサービスの利用につながったとか、独居高齢者の施設入所につながったことなどで訪問看護の価値を評価することがしばしばありますが、それだけではないということです。その人がその人の思うように暮らし続けることができれば、それが成果であってよいのです。

そのまままんざらでもない

このところ、「独り暮らしで動けなくなったらどうすればいいんですか？」と悩む初老期の人々に出会うことが多いです。家での1人ひとりの物語は、皆が知っていることではなく、当事者と専門職だけが知ることです。その一般には見えない暮らし方があることを、この漫画で感じてほしいと思います。

今、国全体でアドバンス・ケア・プランニングが推進されていますが、ここに登場する主人公たちは、特別な意思決定をしないまま、暮らしているように思えます。そうだとすると、まんざらでもない感じが漂い、ほのぼのと心が温まる気持ちができるんですね。

よどんだ空気、よれよれの皮膚、居間での摘便、味噌汁にお団子、アジサイに柿の種、リアルな物語をリアルな色彩の漫画が語りかけてくるようです。漫画だからこそ伝わる空気があり、物語だからこそ時空を超えて人が人をケアすることの意味を表現できたのではないかと感じました。